

江戸時代の日韓交流 — 朝鮮通信使と岸和田藩

大阪観光大学

名誉教授 中 尾 清

1 はじめに

本（2015）年は、日韓国交回復50年という記念すべき年である。

雨森芳洲の“誠信外交”の精神に学び、様々な困難を乗り越えて、未来永劫に善隣友好関係を続けよう。

(1) 現代の“韓流”と江戸時代の“韓流”・古代の“韓流”

(2) 「朝鮮通信使」学習の原点

- ① 中学生時代のある日の回想
- ② 兵庫の津における朝鮮通信使

(3) “通信の国”と“通商の国”

(4) 江戸時代の朝鮮通信使と雨森芳洲の“誠信外交”

対馬藩の儒者である雨森芳洲（1668～1755）は、朝鮮方佐役として長年にわたり朝鮮国との外交・交易の実務に携わり、朝鮮通信使に随行して、対馬から江戸を二度往復するなど、善隣友好に大きな役割を果たした。芳洲は、朝鮮国を“先文の国”“礼節の国”として尊敬し、その国の人情・事勢に通じ、「互いに欺かず争わず、真実をもっての交わり」が肝要であるとする、いわゆる“誠信外交”を実践した。

(5) 本講演の目的

本講演の目的は、江戸時代における朝鮮通信使との善隣友好交流と雨森芳洲の“誠信外交”の思想など、地域が持った歴史をフルに活かしたまちづくりや“草の根の国際交流”を実践している滋賀県高月町雨森区における住民組織を中心とした「協働」型の日韓・国際観光交流の実践事例を考察することによって、今後における持続可能な政策のあり方を探ることである。

2 豊臣秀吉の朝鮮出兵と日朝国交回復

(1) 文禄・慶長の役（壬申倭乱・丁曾再乱）（1592・1597年）

(2) 第1次～3次の使節（1607～1624年）

「回答兼刷還使」—日朝国交回復と被虜の刷還

(3) 第4次～12次の使節（1636～1811年）

信(まこと)を通ずるという意味での「朝鮮通信使」

(4) 日本とは「警戒して交わる」というのが朝鮮国の方針

3 朝鮮通信使と「文化・交流」の展開

(1) 朝鮮通信使とは

朝鮮通信使とは、徳川将軍の襲職（代替わり）の時など、12回（最後は対馬止まり）にわたって、わが国に派遣された外交・文化使節団である。朝鮮国王の国書を奉じて、漢城（現在のソウル）から江戸まで旅をした。そして、将軍・諸大名、学者、文人をはじめ民衆に至るまで、各界・各層の日本人との華やかな「文化・交流」を繰り広げた。

毎回、正使・副使・従事官の三使以下 400～500名で構成された。随員の中には学者、文人、書家、画家、医師などの他、楽隊や曲技団も加わっていた。

(2) 対馬藩の迎接

釜山まで出迎えに行き、対馬からは、藩主以下 300～500名が警護しながら壱岐、瀬戸内海、大坂、淀川、京都を通過して江戸（第12次は対馬止まり）まで随行した。

(3) 徳川幕府の対応

威信をかけて朝鮮通信使一行を歓待し、諸大名をはじめ学者や文人などは、当時の進んだ朝鮮の文化を吸収しようとして、至る所で彼らとの漢文による筆談や漢詩の応酬などによる文化交流がなされた。

(4) 民衆の対応

民衆はそれまで見たことも聞いたこともないエキゾチックな異国の服装や踊り、賑々しく奏でられる楽器の音色を耳にしようと浴道にあふれた。

(5) 申維翰(シユハ)の『海游録』にみる“日本観”の変化

(6) 対馬藩の儒者である雨森芳洲の『交隣提醒』と誠信の交わり

「誠信と申し候は、実意と申す事にて、互いに欺かず争わず、真実をもつての交わり候を誠信とは申し候」と、説いている。

(7) 朝鮮通信使の招聘の終焉

第11次（1764年）朝鮮通信使の来日後、日本では、天明の凶作・飢饉（1782～85年）に見舞われ、各地で打ちこわしがおこり、幕藩体制が揺らいだ。

幕府・諸大名も朝鮮通信使接待の経済的負担（毎回百万両）に耐えかねて、1811（文化8）年の第12次は、対馬での応接（易地聘礼）となった。以後、朝鮮通信使の招聘は途絶え、釜山の「倭館」と対馬での外交・通商のみになった。

(8) 「征韓論」とその後の歴史

①「征韓論」

②朝鮮に開国を強要して不平等な日朝修好条規の締結—1876（明治9）年

③日清戦争(1894-95年)、日露戦争(1904-05年)

④韓国併合—1910（明治43）年、1945年の第二次世界大戦敗戦まで「植民地支配」

⑤この「不幸な歴史」を通して、江戸時代に展開された善隣外交と「文化交流」の主役であった朝鮮通信使の果たした歴史的意義は歪曲され、多くの日本人の前から隠され、忘却の彼方に押しやられてしまった。

4 通信使の影響を受けた伝統芸能の事例

- (1) 牛窓町「唐子踊り」
- (2) 江戸の天下祭り（山王祭・神田祭）
- (3) 津市分部町の「唐人行列、歓喜踊り」・鈴鹿市東玉垣町の「唐人踊り」

5 大阪での朝鮮通信使

(1) 岸和田藩の迎接

天和2（1682）年 岡部内膳正行隆
正徳元（1711）年 岡部美濃守長泰
享保4（1719）年 岡部美濃守長泰
延享5（1748）年 岡部美濃守長著
明和元（1764）年 岡部内膳正長住

(2) 『朝鮮諸人筆語詩巻』（岸和田藩士安井家伝来、岸和田市立郷土資料館蔵）

- ①自己紹介
「願聞貴号」「俺性金、号退石」「緑疇貴名否」
- ②子供は何人？
「有二子、皆成長」「一、十九、一、十六、明運・明進其名也」
- ③大阪は摂津国なのになぜ泉州の殿様が接待するの？
「大坂為摂州所属、則泉州之来待何故」
- ④泉州の殿様がなぜ美濃守？
「貴藩太守居泉州、職則称美濃守如何也」

(3) 享保4（1719）年 岡部美濃守長泰 往路接待 大阪 9月4～10日

「館伴は岡部美濃守藤原長泰にして、老衰して人に似ず。支持官として町奉行が二人おり、一人は北条安房守（北条氏英）、他の一人は鈴木飛驒守（鈴木利雄）という。進退がいじけており、言辞も十分に使いこなせない。しかし、これみな関白の重臣にして、大阪の留守役である。日本の官爵は、世襲をもってするゆえ、人を扱はず、怪鬼のごとき輩がいくんどその任を能くなしえようか。笑うべきことだ。」（申維翰『海游録』東洋文庫）

(4) 金漢重（キムハンジュン）の看病と死去

1764（宝暦14）年2月10日、行年22歳

(5) 崔天淙（サイチョンジョン）殺害事件

1764年4月7日、対馬藩の通訳鈴木伝蔵が殺害

6 近江路 — 朝鮮人街道

- ①野洲町小篠原から彦根市鳥居本までの40kmのことで、浜街道とも言われる。
- ②慶長5年、関が原合戦に勝利した徳川家康は、この街道を通して京へ上ったので、“戦捷街道”ともいわれ、その後歴代の徳川将軍が上洛するときはこの道を通った。
徳川将軍の吉例の道として、大名行列も通行できなかった。
- ③朝鮮通信使は、“国賓”であり、徳川将軍にとって重要な使節であるので、そこを通行させている。

7 現代における“雨森芳洲と朝鮮通信使”事業 — 対馬・厳原町の取り組み

(1) 大韓民国（韓国）と朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の誕生 — 1948年

(2) 「日韓基本条約」の締結、国交回復 — 1965年

(3) 「離島」故の対馬の苦悩

対馬は、戦前のように朝鮮半島と自由に往来できなくなり、漁業では、韓国とのトラブルは絶えなかった。韓国との国交回復がなされたが、対馬の活躍は、過去のものとなって対馬は、「離島」故の苦悩に喘いでいた。

(4) 高度成長 — レジャーブーム — 「ディスカバー・ジャパン」キャンペーン

(5) 対馬の特性を活かした観光による地域経済の振興策の模索

- ① 「郷土の偉人発掘作業」
- ② 対馬藩の儒学者であり外交官である雨森芳洲の発掘
- ③ その精神である「誠信外交」を軸にした文化・観光・交流事業の開発への取り組み

(6) 厳原町の取り組み

- ① 夏祭り「対馬アリラン祭り」における「朝鮮通信使行列」の再現
- ② 通信使ゆかりの滋賀県高月町、岡山県牛窓町との地域間交流の実施
- ③ 釜山市影島区との姉妹提携、国際交流協会の設立などを通じた「国際交流の島」づくり
- ④ 城下町・厳原の歴史的町並み修景事業
- ⑤ 日韓学術交流、日韓映画祭、文献整備事業 などの計画・実施

8 盧泰愚韓国大統領の来日と現代に蘇った「誠信外交」の精神

雨森芳洲や通信使がマスコミに大きく取り上げられたのは、1990年5月、盧泰愚韓国大統領が来日した時のことである。宮中晩餐会で天皇は、「江戸時代、朝野を上げて通信使を歓迎した」と述べ、盧大統領は、「270年前、朝鮮との外交にたずさわった雨森芳洲は、誠意と信義の交際を信条としたと伝えられます。かれの相手役であった玄徳潤は、東葉に誠心堂を建てて日本の使節をもてなしました」（『朝日新聞』90年5月25日）と、雨森芳洲や日本の使節に触れた。この盧大統領の発言によって、多くの日本人にとって忘れられていた江戸時代の通信使と雨森芳洲の業績が広く知られるようになった。

9 朝鮮通信使縁地連絡協議会の結成

盧大統領の来日に追い風を得た長崎県厳原町は、1992年2月、朝鮮通信使ゆかりの市町に呼びかけて「朝鮮通信使フォーラム」「朝鮮通信使シンポジウム」などを厳原町で開催した。その「フォーラム」で、朝鮮通信使ゆかりの地の連携組織「朝鮮通信使縁地連絡協議会（仮称）」（以下、「縁地連」という。）の結成が提案され、賛同を得た。

厳原町は、この趣旨に添って、92年度から、ゆかりの市町に

- ① 「縁地連」結成の計画説明と支援・参加の要請をした。
- ② そして、通信使関連資料の確認などを行い、95年11月、厳原において、縁地連の結成大会が自治体や文化団体の関係者約300人の参加により、開催された。

10 雨森芳洲をキーにした日韓・国際観光交流の事例

(1) 雨森芳洲と滋賀県長浜高月町

滋賀県の琵琶湖の北部周辺は湖北地方と呼ばれている。長浜市高月町はその湖北地方にあり、面積は、28.27 km²、世帯数は、2,778世帯、人口は、10,653人で、「花と観音の里」として知られている。とくに渡岸寺の十一面観音（国宝）は有名である。

また、雨森芳洲の生誕地である雨森区は高月町の大字のひとつで、面積1.84km²、世帯数は、115世帯、人口は、523人で、農業従事者の減少により、住民の就業形態は変化しているが、家並み、近隣との交際など純農村の特徴が色濃く残り、住民に守り育てられている地域である。

(2) 東アジア交流ハウス雨森芳洲庵の建設

1924（大正13）年、「芳洲会」が設立され、芳洲の生誕地跡の芳洲書院を中心に芳洲の顕彰や青少年育成の活動が展開されていた。昭和期に入り一時下火になり、一般には知られなくなったが、戦後、韓国・北朝鮮との外交や朝鮮通信使の研究が盛んになり、芳洲の偉大さが紹介されるようになってきた。それに伴って、雨森区は、関係機関に新たな芳洲書院の建設を要望してきていたところ、83年度、滋賀県の「小さな世界都市づくりモデル事業」に採択され、実現されることになった。84年、東アジア交流ハウス・雨森芳洲庵（以下、「芳洲庵」と略す。）が開館されると「芳洲会」も再興（85年）された。

(3) 高月町雨森区の「花の芳洲の里づくり」

これがきっかけの一つとなって、高月町雨森区では、住民がきわめて自然体で楽しみながら花のまちづくりを進めてきた。1983年の滋賀県「わが町を美しく」コンクール金賞・受賞以来、数々のまちづくり活動で表彰されている。また、「ふるさと雨森の風景を守り育てる協定書」（85年）を締結し、建築物の形態・意匠・色彩の遵守、敷地内の緑化、生け垣の設置、小川の浄化など、きめ細かな活動を地区ぐるみで展開し、純農村の景観形成・維持に努めてきており、雨森を訪れる人々にうるおいとやすらぎを与えている。

(4) “草の根の国際交流”

芳洲庵が開館されると韓国から青少年が訪れるようになった。87年の韓国青少年連盟の高校生が最初の来訪で、その後は、ほぼ毎年雨森を訪れるようになり、地元の青少年との交流が引き継がれてきた。97年には、雨森の中学生のほとんどが韓国へ交流に出かけ、ホームステイを体験し、相互理解を深めてきた。このように雨森区は、集落ぐるみの交流を継続し、87年から昨年までに、雨森を訪れた韓国の青少年は、約1,500人を数えている。

(5) 「縁地連」と高月町の取り組み

1995年11月、巖原町において、通信使ゆかりの地の連携組織「朝鮮通信使縁地連絡協議会」が結成された。以後、福山市・鞆の浦（96年）、牛窓町（97年）で全国大会が順次開催され、98年11月には、滋賀県高月町で「朝鮮通信使ゆかりの町全国交流会高月大会」が開催された。（なお、昨年、9月に韓国釜山市で開催された。）

高月大会では、「湖北の町からアジアが見える」をキャッチフレーズに、研究発表、特別講演、津市分部町・唐人踊り、交流の歌などの披露、通信使饗応料理の再現・展示、日韓青少年交流写真展、韓国農楽の披露、“雨森芳洲と通信使行列”などが行われた。

11 おわりに―日韓「国際観光交流」のあり方と“日韓の懸け橋”

(1) 金大中韓国大統領の来日と新たな展開への期待

1998年10月、金大中韓国大統領が来日し、皇居での晩餐会で天皇は、「わが国が朝鮮半島の人々に大きな苦しみをもたらした時代がありました」（『東京新聞』98年10月8日）と、改めて日本の責任を示し、「深い悲しみ」を表明した。金大統領は、植民地支配に触れず、21世紀に向けた両国の緊密なパートナー関係や日本のアジア経済回復のための機関車としての役割の期待に言及し、「われわれ皆が緊密で真心のこもった相互協力を通じて、誇るに足る隣国関係を確立して後世に残せるよう、共に努力し合おう」（前掲紙）と挨拶した。また、「文化及びスポーツ交流の一層の活発化、研究者、教員、ジャーナリスト、市民サークル等の多様な交流の促進、査証制度の簡素化、中高生の交流事業の新設、ワーキング・ホリデー制度の導入など」を盛り込んだ共同宣言が発表され、新たな展開への期待が大きく膨らんだ。近年、日韓の歴史的な認識も徐々に深まり、両国の国際観光交流は、新たな時代を迎えた。

(2) 「縁地連」釜山大会と「2003年朝鮮通信使 韓・日文化交流事業」

2003年、「縁地連」の大会は、海外で初めて韓国プサン市で開催された。近年、韓国でも“平和な時代”の朝鮮通信使に関心が高まってきており、韓国側からの研究やイベントが盛んに開催されるようになってきている。

表1 「縁地連」の開催年次

開催年	開催地	開催年	開催地
1995	長崎県巖原町	2006	広島県呉市（蒲刈）
1996	山口県下関市	2007	静岡県静岡市（清水）
1997	広島県福山市（鞆浦）	〃	滋賀県彦根市
1998	滋賀県高月町	2008	山口県下関市
1999	長崎県巖原町	2009	滋賀県高月町
2000	岡山県牛窓町	2010	福岡県新宮町（相島）
2001	兵庫県御津町（室津）	2011	長崎県対馬市（巖原）
2002	滋賀県近江八幡町	2012	大韓民国プサン市
2003	大韓民国プサン市	2013	岡山県瀬戸内市
2004	長崎県対馬市（巖原）	2014	埼玉県川越市
2005	岐阜県大垣市	2015	岐阜県大垣市

(3) 日韓「国際観光交流」のあり方と“日韓の懸け橋”

前田勇は、日韓の観光交流について「観光を相互理解に役立て、さらに“継続的发展”を目指すためにも、首都や大都市だけではなく、地方へ出かけて、生活文化に直接触れたり、歴史的資源から学んだりする“多様な観光”を広げていくことが期待されている」と、指摘している。高月町雨森区は、雨森芳洲の「互いに欺かず争わず、真実をもつての交わり」“誠信外交”の精神を基本にして、“草の根の国際交流”を政策として掲げ、民間非営利(NPO・NGO)の住民組織と他のセクターとの「協働」により、これを実践に移し、相互理解を深め“日韓の懸け橋”となってきた。そこに持続可能な「国際観光交流」のあり方の一端がうかがえる。大いに学び実践すべき手本である。

(4) 「朝鮮通信使の道」を世界遺産に！

朝鮮使節使一覽

西曆	年 代		干支	正使	副使	從事官	製述官	總人員(大坂留)	使 命	使節関係の記録 および編纂物	備 考
	日本・朝鮮										
一六〇七	慶長一二・宣祖四〇		丁未	呂祐吉 (慶溪)	慶暹 (七松)	丁好寛 (二翠)		四六七	修好 回答兼刷還	海槎録(慶暹)	国交回復
一六一七	元和三・光海君九		丁巳	吳允謙 (楸灘)	朴梓 (雲溪)	李景稷 (石門)		四二八(七八)	大坂平定祝賀 回答兼刷還	扶桑録(李景稷) 東槎上日録(吳允謙)	伏見行礼
一六二四	寬永元・仁祖二		甲子	鄭 岬	美弘重 (道村)	辛啓榮 (仙石)		三〇〇	家光襲職祝賀 回答兼刷還	東槎録(美弘重)	
一六三六	寬永一三・仁祖一四		丙子	任 統 (白麓)	金世謙 (東溪)	黄 屏 (浪漫)	權 伏 (菊軒)	四七五	泰平祝賀	丙子日本日記(任統) 海槎録(金世謙) 東槎録(黄屏)	以降「通信使」と称す 日本国大君号制定 日光山遊覽
一六四三	寬永二〇・仁祖二一		癸未	尹順之 (澤溪)	趙 綱 (龍洲)	申 瀾 (竹堂)	朴安期 (螺山)	四六二	家網誕生祝賀 日光山致祭	海槎録(申瀾) 東槎録(趙綱) 癸未東槎日記	東照社致祭
一六五五	明曆元・孝宗六		乙未	趙 行 (翠屏)	俞 瑒 (秋潭)	南龍翼 (靈谷)	李明彬 (石湖)	四八八(二〇三)	家網襲職祝賀 日光山致祭	扶桑録(南龍翼)	東照宮拜礼および大 猷院致祭
一六八二	天和二・肅宗八		壬戌	尹趾完 (東山)	李彦綱 (鷺湖)	朴慶俊 (竹菴)	成 碗 (翠虚)	四七五(一一二)	綱吉襲職祝賀	東槎日録(金指南) 東槎録(洪禹載)	
一七一	正徳元・肅宗三七		辛卯	趙泰億 (平泉)	任守幹 (靖菴)	李邦彦 (南岡)	李 碩 (東郭)	五〇〇(二二九)	家宣襲職祝賀	東槎録(金頭門)	新井白石の改革
一七一九	享保四・肅宗四五		己亥	洪致中 (北谷)	黄 瑠 (鷺汀)	李明彦 (雲山)	申維翰 (青泉)	四七五(二〇九)	吉宗襲職祝賀	海槎日録(洪致中) 海遊録(申維翰) 扶桑紀行(鄭后僑)	
一七四八	寬延元・英祖二四		戊辰	洪啓禱 (滄窩)	南泰書 (竹裏)	曹命采 (蘭谷)	朴敬行 (矩軒)	四七五(八三)	家重襲職祝賀	日本書記 奉使日本時間見録(曹 蘭谷)	
一七六四	明和元・英祖四〇		甲申	趙 曦 (濟谷)	李仁培 (吉菴)	金相翊 (弦庵)	南 玉 (秋月)	四七二(二〇六)	家治襲職祝賀	海槎日記(趙曦)	崔太宗殺害事件
一八一	文化八・純祖一一		辛未	金履喬 (竹里)	李勉求 (南霞)		李頌相 (太華)	三三六	家齊襲職祝賀		對馬聘礼

注 中村榮孝・李元植両氏の表を一部訂正した。(田中健夫)
 (朝日新聞社「宗家記録と朝鮮通信使展」より転載)